

輪廻転生における因果業報

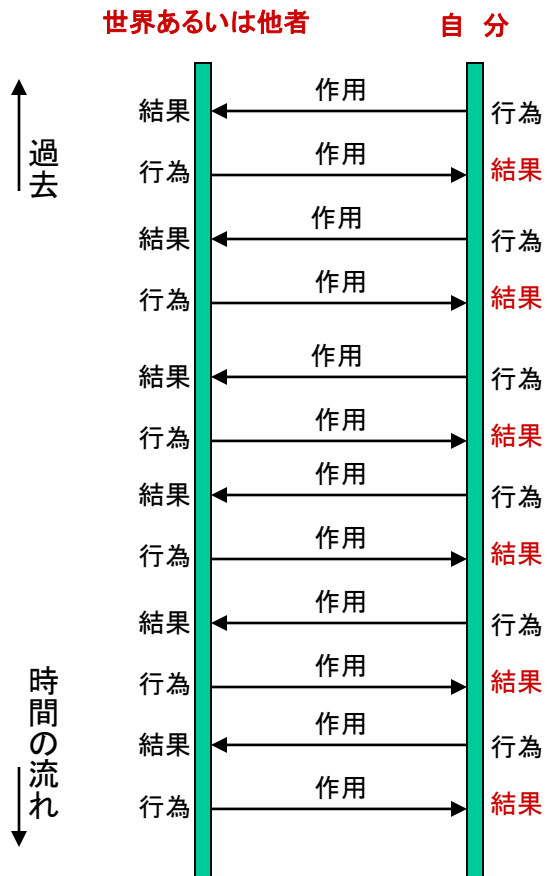
何か不幸なことが起きると、前世(生まれる前の人生)で悪事を行った報いと言われる。これを悪因悪果・善因善果(善い結果には自分が過去に為した善い行いが、悪い結果には自分が過去に為した悪い行いが存在する)、あるいはそれを称して「因果業報」と言われますが、これらはすべて間違いです。

前世などは存在しません。これは不幸な出来事の合理説明(実は不合理)をして自分自身を無理やり納得させる(心理学的な合理化)ためのものか、あるいは政治権力が、大衆が政府に反感を抱かない(社会の不満を他へ反らす)ようにするための施策(あるいは陰謀)に過ぎないのです。

以下にこの「因果業報」(自分に現れた結果は、自分が行ったことに原因がある)が誤りであることを示します。

2体問題

独我論



左図のように単純に宇宙には自分と他者の二つの存在しかないと仮定しよう。

自分は輪廻転生により無限の過去から存在しているものとする。今現在他者から何らかの作用を受ける。結果として自分は不幸になったり、あるいは幸福を得たりする。それは他者の作用があったからに他ならないが、その大もとの原因は、過去に自分がその他者に対して何らかの作用を及ぼしたことが要因である。たとえば相手の頭を殴った。だから今殴り返された。ただし生まれてから今日までその相手の頭を殴った記憶はない。それは前世での行いにより今報いを受けていると解釈される。

ただ、前世で相手の頭を殴ったのも、その前に相手から頭を殴られたからに他ならない。すると最初どっちが殴ったかが問題になる。しかしいずれにしても相手から殴られてたはず。理由無く殴ることはありえない。なぜならそれは因果律(何事にも原因が存在する)に反する。さらに突き詰めていけば無限の過去に戻らなければならない。無限の過去の状態を特定することは不可能である。いずれにしても自分の今の状態を自分一人の100パーセントの責任に帰すことは原理的に無意味である。

この自分に起こった結果に対する自分の責任ということにおいて、唯一問題を解決する方法がある。それは独我論であり、宇宙の存在者は自分一人とすることである。すなわち今世界のあらゆる場所で起こっている全てのことの責任は自分一人に帰す。例えば地球の反対側で起こった殺人事件も、その罪は自分一人にあると。なぜなら宇宙の存在者は自分一人であるからである。他者は存在しないのであるから、責任を問うことは不可能である。ただし他者が存在しないということから、他人から責任を問われることもない。あくまで責任は自分が自分に対して問われるものである。余談ですが、これが青山の考え方です。つまり世界中の全ての出来事の責任は自分一人にあると、青山はそう解釈しています。